

子どもを見る

5つの眼差し

— 支援の原点に立ち返る —

ルドルフ・シュタイナーの治療教育をめぐる言葉から

第1の眼差し

判断する前に、見る

原典のことば

Gerade auf diesem Gebiete ist es von eminentester Notwendigkeit, überhaupt keine Kritik zu üben, sondern die Sachen reinlich anzuschauen.

まさにこの分野においては、まったく批判をすることなく、事柄を純粋に観察することが極めて重要なのです。

Rudolf Steiner, GA317, Erster Vortrag, 25. Juni 1924, Seite 13

100年前の講義では

シュタイナーは、大人の持つ一般的な基準や常識をもって、子どもの非定型な現れを評価・批判してはならないと語っています。治療教育の出発点として、大人の主観や先入観を交えず、目の前の事実をただ純粋に見つめることの重要性が説かれています。

【原典から着想した現代的な読み】今の私たちへ

私たちは日々の指導の中で、無意識のうちに「できていないところ」に目を奪われ、評価を下してしまいがちです。判断する前に、まず目の前の姿をそのまま見る。評価を手放し、ありのままの事実を受けとめることが、すべての支援の第一歩となります。

こんな場面で

授業中に子どもが急に立ち歩いてしまうとき、「またルールを破った」とすぐに判断するのではなく、「今、何が起きているのだろう」と少しでも視点を変えてみる。

ひとつの問い

私は今、この子を「困った子」として評価しているだろうか。
それとも、何が起きているのかを観察しているだろうか。

方法より先に、関係がある

— — —

原典のことば

Sie an das Kind herantreten mit wirklicher Liebe.

あなたがたが本当の愛をもって子どもに近づくなれば。

Rudolf Steiner, GA317, Zwölfter Vortrag, 7. Juli 1924, Seite 183–184

100年前の講義では

どれほど専門的な技術や知識があっても、それだけでは十分ではなく、子どもに対する本当の愛（wirkliche Liebe）をもって子どもに近づくことの重要性が語られています。技術やマニュアルに頼る前に、一人の人間として温かく子どもに向き合う姿勢が求められています。

今の私たちへ

【原典から着想した現代的な読み】

支援のテクニックや方法論に行き詰まったとき、私たちはつい「もっと効果的なスキルはないか」と探し求めてしまいます。しかし、技法よりも先に、まず心を寄せること。子どもへの深い関心こそが、教育的働きかけの確かな土台となります。

こんな場面で

支援マニュアル通りに対応しているのに、子どもの状況が改善せず、焦りや疲労を感じてしまったとき、スキルを増やすことよりも、もう一度この子に向き合う温度を確かめてみる。

ひとつの問い

私は支援の「やり方」ばかりに気を取られ、この子自身への思いを忘れてはいないだろうか。

重くなりすぎない

— — —

原典のことば

Nicht die bleierne Schwere, sondern Humor, wirklicher Humor, Lebenshumor.

鉛のような重苦しさではなく、ユーモア、本当のユーモア、生のユーモアなのです。

Rudolf Steiner, GA317, Sechster Vortrag, 1. Juli 1924, Seite 103

100年前の講義では

困難を抱える子どもに対峙する際、大人が深刻になりすぎて、場に鉛のような重苦しい空気を持ち込んでしまうことを戒めています。教育の現場において、「鉛のような重苦しさ」ではなく、「ユーモア、本当のユーモア、Lebenshumor」が必要だと語っています。

今の私たちへ

【原典から着想した現代的な読み】

子どもの発達や行動の課題に直面すると、私たちはどうしても深刻になり、緊張した空気をまとってしまいます。しかし、大人の心にある重苦しさは、子どもにも伝わります。深刻になりすぎず、心のゆとりを持つこと。その明るい余白が、子どもを安心させます。

こんな場面で

課題が予定通りに進まず、教室や家庭の空気がピリピリと張り詰めてしまったとき、ふと肩の力を抜いて、少し違った角度からその状況をとらえ直してみる。

ひとつの問い

私の表情や声は今、鉛のように重くなっていないだろうか。

子どもは毎回、新しい謎

原典のことば

Derjenige, der Erzieher werden will für abnorme Kinder, der ist nie fertig, für den ist jedes Kind wieder ein neues Problem, ein neues Rätsel.

特別な教育的支援を必要とする子どもの教育者になろうとする人は、決して完成することがありません。その人にとって、どの子どもも毎回、新しい問題であり、新しい謎なのです。※原文では *abnorme Kinder* という、当時の時代背景を反映した表現が用いられています。

Rudolf Steiner, GA317, Vierter Vortrag, 28. Juni 1924, Seite 72

100年前の講義では

すべての子どもに一律に当てはまる絶対的なマニュアルは存在しないと説かれています。一人ひとりの子どもが固有の存在であるため、教育者は過去の経験や枠組みに安住せず、常に謙虚な姿勢で学び続ける必要があると語られています。

今の私たちへ

【原典から着想した現代的な読み】

「この障害にはこの対応」という定型の枠に子どもを当てはめてしまうと、目の前の実際の姿が見えなくなってしまうます。過去の経験に頼りすぎず、この子は今、何を物語っているのか。子どもは常に新しく、私たちもまた、この子から新しく学び続ける存在です。

こんな場面で

「以前にも似たような子を担当したから大丈夫だ」と思ったとき、ふと立ち止まって、目の前の子どもが持っている独自の表情やサインに改めて目を向けてみる。

ひとつの問い

私は自分の知っている枠に、この子を当てはめようとしていないだろうか。

見る、試す、また見る

— — —

原典のことば

Es muß bei einer solchen Sachlage, wie man sie da hat, fortwährend Hand in Hand gehen die Beobachtung des Falles und die mögliche Therapie.

このような状況においては、個別のケースの観察と可能な治療（働きかけ）は、常に手を取り合って（並行して）進まなければなりません。

Rudolf Steiner, GA317, Neunter Vortrag, 4. Juli 1924, Seite 135

100年前の講義では

対象の観察と、それに対する実践的なアプローチは切り離せるものではないと述べています。働きかけを通して子どもの反応を観察し、その観察に基づいてまた働きかけを調整していくという、「観察と可能な治療」を切り離さず、絶えず並行して進める必要があると語っています。

今の私たちへ

【原典から着想した現代的な読み】

一度決めた支援計画や対応をただ硬直して続けるのではなく、自分の関わりに対する子どもの反応をしっかりと見取る。働きかけながら観察し、観察しながら働きかける。その柔軟な往復運動の中にこそ、確かな支援が育まれます。

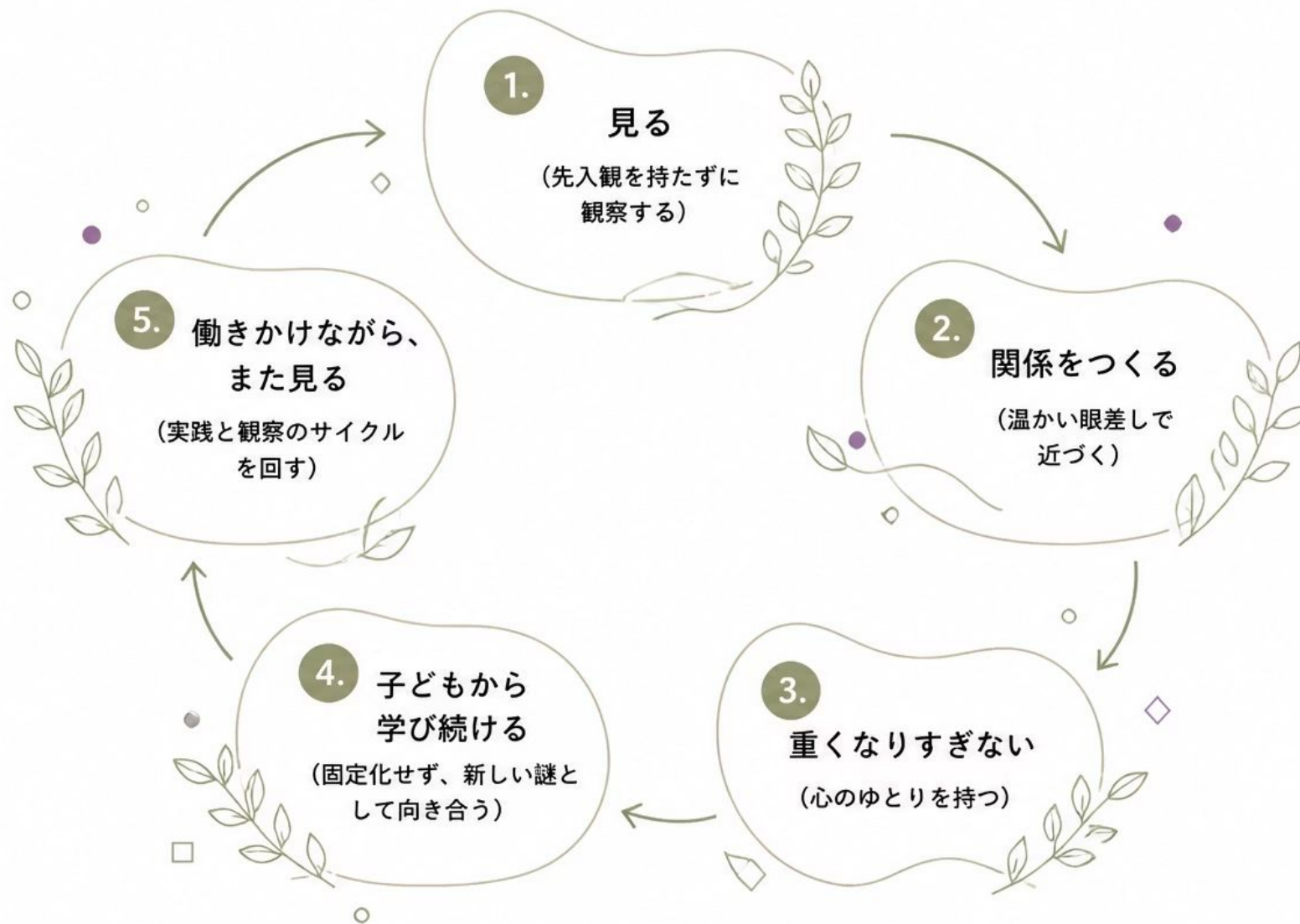
こんな場面で

立てた計画通りにいかなくて戸惑ったとき、「計画が失敗した」と嘆くのではなく、「この反応から何が見えてきただろう」と次のアプローチのヒントを探してみる。

ひとつの問い

私は、自分の関わりに対する子どもの反応をしっかりと観察して、次の行動を決めているだろうか。

5つの眼差しをつなぐ



ここまで見てきた5つの眼差しは、どれか一つが優れているというのではなく、ひとつの循環を形作っています。

【5つの原典から着想した現代的な読み】

支援とは、あらかじめ用意された正解を当てることではありません。子どもとの関わりの中で、自分の理解や態度を少しずつ更新し続ける営みなのです。

その人の本質まで、傷ついているのだろうか

原典候補

daß ja nur der physische Körper das Gebrechen hat, daß aber die dem physischen Körper zugrunde liegende Geistgestalt voll intakt ist.

「損なわれているのは身体であって、その身体の基礎にある精神的な形（Geistgestalt）は完全に損なわれていない。」

Rudolf Steiner, GA39, Willy Schlüter宛書簡, 12. Juli 1915, Seite 646

このページの位置づけ

この言葉は「第6の眼差し」ではありません。

5つの眼差しが、「大人は子どもとどう関わるか」を扱うのに対し、このページは、「そもそも私たちは、その子という存在をどう見るのか」という、さらに根底にある人間観を扱います。

【原典から着想した現代的な読み】

子どもに障害や困難があるとき、その困難だけを見て、その子自身まで「壊れている」と捉えてしまわないこと。

目の前に現れている困難と、その子の存在そのものを同一視しない。

支援とは、子どもの存在を否定して別の人間に作り替えることではなく、その子がその子自身として世界と関わっていくことを支える営みとして捉え直すことができる。

100年前の言葉を、そのまま現代の答えにしない

この冊子で紹介した言葉は、1924年の治療教育講義、そして一部はそれ以前の書簡に由来します。

そこには、現代とは異なる医学観、障害観、人間観、そして人智学という思想的背景があります。

だからこそ私たちは、100年前の言葉をそのまま現代の特別支援教育の「正解」に置き換えるのではなく、

原典では何が語られているのか。

その言葉は、どのような時代と文脈の中で語られたのか。

今の私たちは、そこから何を問い直すことができるのか。

という三つの層を分けて読むことを大切にします。

この冊子の「今の私たちへ」「こんな場面で」「ひとつの問い」は、そのための現代的な橋渡しです。

シュタイナー本人が現代の特別支援教育について述べた言葉ではありません。

うまくいかない日があってもいい。

すべてを完璧に理解してから関わる必要なんてない。

子どもの反応から、何度でも新しく学び直していい。

日々の忙しさや焦りの中で、支援する大人の心も揺らぎます。そんなとき、ほんの少し立ち止まって「自分の眼差し」に気づくことができれば、それだけで子どもとの間に新しい空気が生まれます。

この小冊子が、あなたの日常に静かな余白と、ささやかな支えをもたらすものでありますように。

主資料

Rudolf Steiner, *Heilpädagogischer Kurs* (GA317)

講義期間：1924年6月25日～7月7日（ドルナッハ）

使用版：1995年版

補助資料

Rudolf Steiner, *Briefe: Band II 1890–1925*, GA39, 2., veränderte und erweiterte Auflage, 1987. Willy Schlüter宛書簡、1915年7月12日、S.646.

注意事項

- 本書に掲載されたGA317のドイツ語原典および日本語訳は、本人未校閲の速記記録に基づく講義録に依拠しています。
- 本冊子中の「今の私たちへ」「こんな場面で」「ひとつの問い」等は、原典の歴史的文脈から着想を得た現代的な編集・解釈であり、シュタイナー本人が現代の特別支援教育について述べたものではありません。
- 本冊子は、現代の医学・心理学・特別支援教育における確定した科学的根拠としてシュタイナーの思想を提示するものではありません。
- 本冊子は、医療的な診断、治療、あるいは専門的な医学的助言を目的としたものではありません。
- 原典には、現代では一般的でない、あるいは不適切と受け取られうる障害に関する表現が含まれています。本冊子では、歴史的資料としての原典との対応を明確にするため、一部を原文に即して訳出しています。